

長野県革新懇ニュース

2016 年 8 月号
(発行日 8 月 10 日)
年会費 5000 円 (送料込)
振替 0510-3-15971

205

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

＝＝＝＝＝今号の主な記事＝＝＝＝＝

- 1 面 藤森俊希さんインタビュー
2 面 1 面の続き、参院選結果に対する声明
3 面 ! 壊憲 NO ! あきらめずに共に考え行動を」
ママは戦争しないと決めた実行委員会
「永六輔さんを偲んで」荒井きぬ枝さん
4 面 随筆「しのびよる戦争、失われる当たり前」堀井正子さん
映画評論「マネーモンスター」

URL：nagano-kakushinkon.com



1944 年 3 月 29 日、広島市生まれ。高卒まで広島で育つ。東京の大学に入学、在学中に就職。2006 年定年退職し長野県茅野市に移住。09 年 11 月、前座良明長友会会長が急逝、直後会長代行、10 年 6 月総会以後長友会会長。12 年 6 月以降日本被団協事務局次長。

国際署名の広がり 核兵器のない世界を

ふじもり としき
藤森 俊希 さん

(長野県原爆被害者の会会長)

被爆体験を聞き
育ったことが原点

Q 被爆体験と、被爆者運動や原水爆禁止運動を続けられてきた思いをお話し下さい。

私は、1944 年 3 月 29 日に広島で生まれました。家族は祖父と父母、それに 6 姉妹、3 兄弟の 12 人で、私は末弟でした。私が育った広島は、中国山地から流れ出た太田川が分かれて形成された三角州にあり、幼いころは花崗岩からできた白い砂が上流から流れ出て、文字通り白砂青松の美しい地域でした。45 年 8 月 6 日に原爆が投下されました。私はまだ 1 歳余りですから、当然その記憶はありません。その日は午前 7 時過ぎに警戒警報が鳴り、防空壕に皆が避難しました。30 分も経たない

うちに解除になり、多くの人が普段通りの生活を始めました。その直後に B 29 の爆音を皆が聞き身構えたときに原爆が地上から 600 メートルのところで爆発し、一瞬にして地獄になりました。私は前の日から体調を崩していて、母が背負って通信病院に連れて行くために土手の上を歩いていった時です。偶然爆心と私たちが親子の間には 2 階建ての民家があり、直接熱線を浴びることは避けられました。しかし、猛烈な爆風で吹き飛ばされて、気が付いたら土手の下にころがっていたとこのことです。その家屋は熱線で燃え上がり、わが家を含むその一帯は全焼地帯となりました。母がなんとか土手に這い上がり市内の方を見たら、もうもうと炎があがっていて、想像を絶する状況だったそうです。

当時、すぐ上の姉 2 人と兄 2 人は疎開していたので、残る 8 人全員被爆しました。13 歳で女学校 1 年だった 4 番目の姉は学徒動員で爆心から 400 メートルのところで建物疎開にあたっていて被爆したようです。翌日、長女と父が妹を探しに爆心近くに行つて探しましたが見つかりませんでした。翌日は母がわたしを背負って探しに行きました。みつかりません。その後、長女が妹を捜しに行ったとき、同じ学校の女生徒が横たわっていたので「敏子を知らないか」と尋ねたところ、「敏子さんは川に入つて『天皇陛下万歳』と叫びながら流れていった」と言ったそうです。当時の女学生はずっと戦争で、楽しい思いをしたことがない。「天皇陛下万歳」と言つて死んでいったのは、軍国主義教育を受けた結果で、あの戦争さなかの教育がいかに子どもたちを蹂躪する酷いものであり、最後には子どもたちを死に追いやった許しがたいものであったということです。だから、今の学校教育のあり方が大変な方向に向かつているのではないかと、危機感をもちますね。

8 月 6 日になると毎年、母が疎開していた 4 人の子どもや私を集め、自らの被爆体験を、涙を流しながら話し聞かせました。父や祖父、姉たちもそれぞれの体験を語りました。わが家だけでなく、夏休みの小学生が遊び疲れて木陰で休んでいると、近所のおじさん、おばさんが、悲惨な体験を話してくれました。そういう話が自然とわたしのからだのなかに入っていったのだと思います。小学校の授業中に突然 ABC C (米国原爆傷害調査委員会) から大きなワゴン車がやってきて、被爆の影響を調べるために問答無用で子どもたちを検査するということもありました。検査はするけれど、治療は一切行わなかった。当時から「被爆者をモルモットにするのか」と強い批判の声があがっていました。ケロイドで顔がひきつった先生から話を聞いたこともあります。

被爆そのものの記憶はなくても、被爆地で育ったということは、被爆の実相が蓄積され、その後の私の生き方を大きく左右することになったと思います。高校生になったころには学校に図書館がありまして、被爆体験集や写真集、詩集など読みふけりました。私の被爆者運動の原点は、母親の被爆体験を聞きながら育ったということと近所のおばさんやおじさん、学校の先生からいろいろな話を聞き、また自分でも勉強しながら育ったこと、甥を白血病でなくしたことも大きいと思います。

被爆 2 世にも
大変な苦難が

Q 「木の葉のように焼かれて」との関わりはどうですか？

「木の葉のように焼かれて」は私の姉が書いた被爆体験の手記のタイトルです。私の 3 番目の姉は当時女学校 4 年生 (16 歳)、原爆が投下されたときは電休日 (註 電力不足のために操業を停止する日) で、学徒動員の仕事は休みで、家にいて被爆しました。祖父と一緒に、屋根の下敷きになりました。なんとか這い出して九死に一生を得ました。

1954 年、結婚して子どもができ、5 歳の次男が夏、体調を崩し歯茎から出血する症状があらわれました。その症状は被爆直後に姉自身も体験したものと同じだったので、慌てて広島大学病院に連れて行ったところ、リンパ性急性白血病という診断が下されました。その後入院を繰り返しながら、まともに学校に通うこともできず、小学校 1 年生の冬亡くなりました。

評価できない
広島のオバマ演説

Q オバマ大統領の広島訪問はどう評価していますか？

マスコミを含め大変な歓迎ムード、盛り上がりでしたが、私としては大変な違和感があり、しつくりこないまま 5 月 27 日を迎えました。当日の演説終了後、オバマ大統領の広島訪問についてシンポジウムをやることになっていて、私も当日パネリストの 1 人として広島にいました。会場にはテレビが放送するオバマ大統領の広島訪問をスクリーンで見られるようにセットし、参加者全員が 1 時間弱、テレビ放送を見入りました。オバマ大統領の演説に感動した人もいたようですが、私は感動しませんでしたし、評価もしません。

【2 面に続く】

